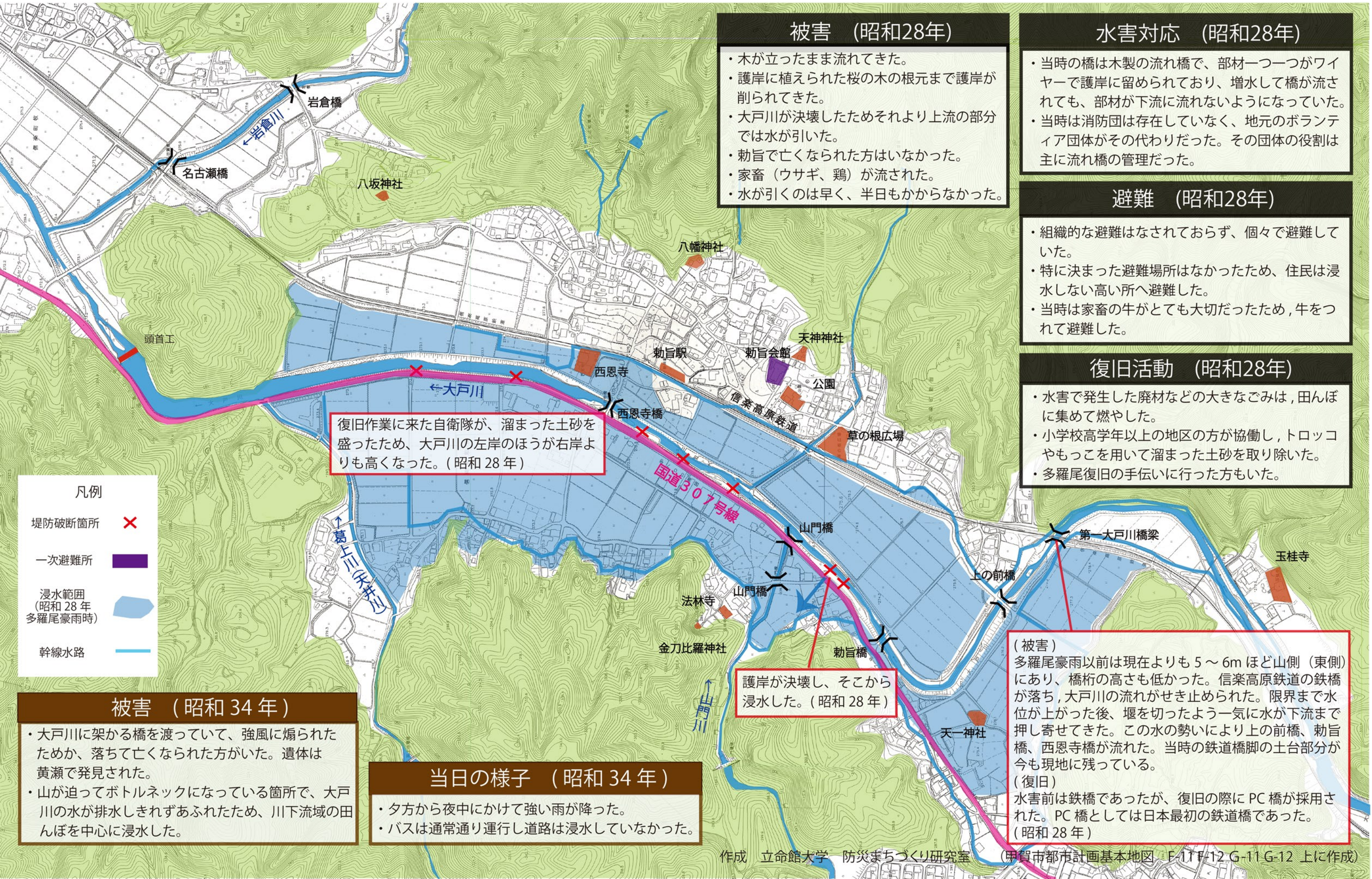
甲賀市勅旨水害履歴マップ　その②　ー昭和28年(1953年)8月14日～15日多羅尾豪雨　昭和34年(1959年)9月25～26日伊勢湾台風ー

（H28.9.14　甲賀市勅旨会館で行った聞き取り調査に基づき作成）

0　200m　N



被害　(昭和28年)

- 木が立ったまま流れてきた。
- 護岸に植えられた桜の木の根元まで護岸が削られてきた。
- 大戸川が決壊したためそれより上流の部分では水が引いた。
- 勅旨で亡くなられた方はいなかった。
- 家畜（ウサギ、鶏）が流された。
- 水が引くのは早く、半日もかからなかった。

水害対応　(昭和28年)

- 当時の橋は木製の流れ橋で、部材一つ一つがワイヤーで護岸に留められており、増水して橋が流されても、部材が下流に流れないようになっていた。
- 当時は消防団は存在していなく、地元のボランティア団体がその代わりだった。その団体の役割は主に流れ橋の管理だった。

避難　(昭和28年)

- 組織的な避難はなされておらず、個々で避難していた。
- 特に決まった避難場所はなかったため、住民は浸水しない高い所へ避難した。
- 当時は家畜の牛がとても大切だったため，牛をつれて避難した。

復旧活動　(昭和28年)

- 水害で発生した廃材などの大きなごみは，田んぼに集めて燃やした。
- 小学校高学年以上の地区の方が協働し，トロッコやもっこを用いて溜まった土砂を取り除いた。
- 多羅尾復旧の手伝いに行った方もいた。

復旧作業に来た自衛隊が、溜まった土砂を盛ったため、大戸川の左岸のほうが右岸よりも高くなった。(昭和28年)

護岸が決壊し、そこから浸水した。(昭和28年)

(被害)
多羅尾豪雨以前は現在よりも5～6mほど山側（東側）にあり、橋桁の高さも低かった。信楽高原鉄道の鉄橋が落ち，大戸川の流れがせき止められた。限界まで水位が上がった後、堰を切ったよう一気に水が下流まで押し寄せてきた。この水の勢いにより上の前橋、勅旨橋、西恩寺橋が流れた。当時の鉄道橋脚の土台部分が今も現地に残っている。
(復旧)
水害前は鉄橋であったが、復旧の際にPC橋が採用された。PC橋としては日本最初の鉄道橋であった。
(昭和28年)

被害　(昭和34年)

- 大戸川に架かる橋を渡っていて、強風に煽られたためか、落ちて亡くなられた方がいた。遺体は黄瀬で発見された。
- 山が迫ってボトルネックになっている箇所で、大戸川の水が排水しきれずあふれたため、川下流域の田んぼを中心に浸水した。

当日の様子　(昭和34年)

- 夕方から夜中にかけて強い雨が降った。
- バスは通常通り運行し道路は浸水していなかった。

作成　立命館大学　防災まちづくり研究室　（甲賀市都市計画基本地図　F-11 F-12 G-11 G-12　上に作成）